

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730360
 研究課題名（和文） 椎尾弁匡と「共生会」を手がかりとした戦前期の仏教社会福祉実践史に関する事例的研究
 研究課題名（英文） A case study of history in practice for Social welfare Buddhism to Search for clues on Shiio Benkyo and “KYOUSEIKAI” in the era of prewar “World War 2”
 研究代表者
 藤森 雄介 (FUJIMORI YUSUKE)
 淑徳大学・国際コミュニケーション学部・准教授
 研究者番号：20364896

研究成果の概要：本研究を通じて、①複数の研究機関附属図書館等でそれぞれ部分的に所蔵されていた、「共生会」の機関誌である雑誌『共生』の戦前期刊行分のほぼ全てを確認し、総目次を作成するとともに、②浄土宗関係者にもその存在が知られていなかった、椎尾弁匡の直筆ノートや手紙をはじめとする新資料を椎尾弁匡ゆかりの寺院である清林寺より預かり、整理分類を行なって目録を作成することができ、椎尾弁匡の「共生～ともいき～」思想「共生会」の活動実態を理解する上で極めて重要な一次資料を整えることができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	1,000,000	0	1,000,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	210,000	3,010,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：社会福祉学、仏教社会福祉、共生、浄土宗、椎尾弁匡

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の動機

例えば吉田久一は、「社会福祉にとって重要なことは、社会福祉問題の社会科学的認識と、その社会福祉問題を担っている人びとの人間的存在に、いかに迫り、問題解決をするかということである。特に後者は宗教的福祉の課題の中心である」（『原典仏教福祉』北辰堂、「解説」）と述べて、現代社会福祉における仏教(宗教)の役割の重要性を指摘している。しかし一方、実際の状況に目を転じてみると、

潜在的には社会福祉の担い手たる可能性を持つ多くの寺院・僧職者が実践活動には至っておらず、「現代の寺院及び僧職者が社会福祉実践を行なう際の理念的根拠を持つことの困難さ」が浮き彫りとなっている。本研究の、仏教社会福祉のモデルを歴史的实践事例から明らかにする試みは、史料に基づく歴史的研究であると同時に、上述のような現代的課題に対する研究としても重要な意義を持つものである。

(2) 筆者の研究経過

筆者はこれまでに、研究協力者として、平成12～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））を受けて行なわれていた「戦後仏教系社会福祉事業の歴史と現状に関する総合研究（12410058）」（研究代表者 長谷川匡俊）に参加し、主に「時宗」及び「融通念佛宗」を担当させて頂いたことにより、現在の仏教社会福祉事業実践を検討する際には、①当該宗団の規模・性格等による情報量の多寡や資料的制約、②宗派別の傾向や特徴等の比較分析の必要性、③諸事実の意味の解釈などの課題があることを痛感した。

そして、その課題に応える為に、研究代表者として、平成16・17年度若手研究（B）の科学研究費補助金の交付を受けて「現代における仏教系社会福祉事業の実践状況と今後の方向性に関する研究（16730293）」を行なった。ここでは、特定の宗団に絞って仏教社会福祉事業実践の現状及び実態を明らかにする過程を通じて、仏教系社会福祉の今後の在り方を考究することを目的として、時宗、融通念佛宗等の複数の教団に対して、それぞれ所属する全寺院・僧職者を対象としたアンケート調査を行なった。

この調査結果からは、社会福祉には関心や意欲を持っているものの、実際の実践活動には至っていない寺院・僧職者が多数存在することが明らかとなったが、その理由の多くは「関心はあるが何をしてよいかわからない」、「寺務に忙しく、実際には行なっていない」等、「現代の寺院及び僧職者が社会福祉実践を行なう際の理念的根拠を持つことの困難さ」を明示するものであり、この新たに明らかになった課題に対して、何らかのモデルを提示する必要性を感じたことが、本研究の出発点となっている。

2. 研究の目的

本研究は、大正・昭和戦前期において、複数の仏教系社会事業実践者に影響を与え、その活動の理念的契機となった椎尾弁匡の「共生～ともいき～」思想と、椎尾の社会的諸活動を支えつつ「共生」思想の啓蒙・普及を担った「共生会」の組織実態を史料に基づいて明らかにするとともに、この歴史的先行事例を通して、現代においても民間社会福祉事業の一角を担っている仏教社会福祉の今後の方向性や仏教信仰・理念に基づく社会福祉事業実践のあり方を考究することを目的としている。

※1 本研究において取り上げる椎尾弁匡（1876～1971）は、浄土宗僧侶として明治・大正・昭和にかけて仏教の社会化に尽力し、その生涯において様々な活躍をされた人物

であるが、同時に「共生」を「ともいき」と読み、浄土宗門の枠を越えて広く仏教と寺院の社会的展開を重視しつつ、地域に根ざした「共生」運動の提唱・実践者として、渡辺海旭、矢吹慶輝、長谷川良信等とともに近代における日本仏教社会福祉事業史に名を残す先達でもある。

※2 「共生会」とは、椎尾の「共生」思想に影響を受けた人々を中心に、大正11年に行われた「第1回共生結集」を契機として発足し、以降「共生」運動の実質的な担い手となった団体組織である。「共生会」自体は直接社会事業を推進する立場ではなかったが、「共生同人」と呼ばれる同会会員の中より社会事業実践を担う者が現れており、その意味においても、社会福祉の視点から組織実態を解明する必要がある。

3. 研究の方法

本研究は、史料に基づいた歴史研究である。椎尾弁匡の「共生」思想や発足時の「共生会」を取り上げてその意義を問う先行的研究は複数見られるが、雑誌『共生』をベースとして大正・昭和戦前期を通じた組織の形成過程にまで踏み込んだ研究は、仏教社会福祉分野のみならず近代仏教史分野においても行なわれていないため、具体的には、既に大半のその存在が確認できている一方で、所蔵場所が複数の図書館等に分散している為に全ての巻号を俯瞰することが困難であった、大正12年より月刊発行されていた「共生会」の機関誌である雑誌『共生』の総目次を作成した上で、①史料に基づく「共生会」の組織形成過程と活動状況の解明、②社会福祉思想史の観点から観た「共生」思想の位置づけと評価、③「共生」思想に基づく社会（福祉）事業実践のあり方に関する事例的検討、といった諸点について、記載内容の分析と、可能な限り椎尾及び「共生会」に縁のある地域、寺院からの現地調査を実施する中で明らかにすることを試みたいと考えた。また、本研究を行なうにあたっては未確認の史料の発見や未整理の資料の存在も想定できる為、浄土宗や当時の仏教界が発行していた雑誌等の刊行物の中から必要なものを収集し、整理分類する作業も同時並行で進めた。

4. 研究成果

(1) 戦前期の雑誌『共生』 総目次の作成

戦前期の雑誌『共生』は、大正大学、佛教大学、三康文化研究所附属図書館等で所蔵されていたが、それぞれ欠号があり、一箇所全てを通して確認することはできなかった為、平成18年年度の主たる研究活動として、

全号を確認、複写し、総目次を作成した。これによって、「共生会」の組織の形成過程を機関誌という一次史料を通して明らかにすることが可能となったが、本報告書では、この一次史料である、戦前期の雑誌『共生』の概要について記しておきたい。

①「共生会」発足の経緯について

まず、機関誌発行の前提となる「共生会」発足の経緯と初期の状況について、若干触れておきたい。

組織としての「共生会」は1922(大正11)年に行われた「第1回共生結衆」がその運動の具体的な始まりであったが、その着想は数年前に遡る事が出来る。その発端は、広く社会的背景としてみれば第一次世界大戦を契機とした急激な好景気による国民一般の奢侈と、それとは裏腹の社会主義、労働運動等を通じて煽られる社会不安、思想的動揺等が挙げられる。そのような社会状況の中、椎尾個人としては、1917(大正6)年12月28日、「毎月のごとく二燈会に出席したとき、あるお方より大正天皇は日本の現状をことのほかお悩み遊ばされたもうていることを承った。(中略)誠に畏れ多き御悩みあらせられることを洩れ承って、赤子として大いに考えねばならぬと深く決するところがあり、また期せずして翌1918(大正7)年、浄土宗管長山下現有の伊勢大廟並びに明治天皇の桃山御陵への参拝を機とする国民覚醒運動としての時局特別伝道の開始に伴い、「まず一宗をあげて時局覚醒の運動に着手し、五条七件の要目に基づき正義、業務、時間、節約等の項目について仏教信仰上または国民生活上からいかに処すべきかについて極力覚醒に努力いたしました。これが共生運動の起源といわれるべきものであります」(椎尾弁匡著『共生の基調』)と述べている。

1922(大正11)年、鎌倉光明寺にて6月21日夕刻の開会式から26日の夕食後の解散までの6日間(実質5日間)、(椎尾を含め)講師共合わせて53名の参加者によって行われた「第1回共生結衆」は、その「結衆の趣意書 共生会の第一回結衆に就て」によれば、「私共は人生共存の大義と共生極楽の決定を致すものとして、この共生会を企てました。要は真の人生を求め、強い信仰に立ちたいとする集まりであります」としており、また「此の会は一宗一派に偏するものではありません。仏教の本義と極致とに立ちて、真人の生活を体現せんとするのでありますから、これに共鳴せらるる諸君は皆共生の同法同行であります」とその門戸を広げると共に、参加者に対しては「六日間の会合に依りて緊張と真実とを体験して、家に、隣間に、寺門に、宗派に、総ての共生に於ける範式となって頂きたいのであります」と、その効果の程を期待している(吉原自覚「共生の思想信仰と其の運動」

『浄土宗布教全書第24巻』)。

さて、このような趣意のもとに行われた「第1回共生結衆」の具体的な内容とは、椎尾の指導講演を主としつつ、参加者全員が起居寢食を共にして、清掃、体操、静坐、念仏、礼拝、共生のつとめ、読誦等の折り込まれた、朝4時半起床夜10時就床の6日間の日程を過ごすというものであり、実際の結衆の中にあつて、椎尾の「深奥なる法界の実相より湧き出る口業説法」(藤井實應「椎尾弁匡先生の片影②」『在家仏教第30号第341号』)のみならず、参加者に混じって草むしりから配膳給仕まで分け隔てなく行う率先垂範の身業説法は、参加者に大いなる感動を与えるとともに、一同「緊張充実の生活を体験するものであつた」(椎尾博士喜寿記念会編『喜寿記念椎尾博士と共生』)という。

ちなみに本結衆の参加費用は、1人5圓(食費等込)であつた。その後、「第1回共生結衆」の成功を踏まえ同年中に「第2回共生結衆」を大阪西福寺で10月26日から30日までの5日間、「第3回共生結衆」を釜山知恩寺で11月1日から5日までの5日間、「第4回共生結衆」を桐生浄運寺で11月9日から13日までの5日間、それぞれ行っている。発足初年度にしてすでに全国に跨って4回の結衆を実施するという事実は、「共生会」がすでにある一定の組織力と実行力を伴っていたことを示しており、この「共生」運動が一朝一夕の思いつきの下に始められたものでなく、椎尾の深い思想信仰を経て生み出されつつも、ある程度の準備段階を経て実施に移された運動であることを物語っているといえよう。

②創刊号および大正期の発行状況

「共生会」の発足及び「第1回共生結衆」から遅れること約11ヶ月、1923(大正12)年5月1日に創刊された雑誌『共生』第1巻第1号(創刊号)は、四六判で全76頁、目次構成は「発行の趣意」2頁に続いて60頁を用いて椎尾の講説「真生の涵養」の掲載があり、以降「時事 開宗記念事業」・「質疑」・「会たより」・「要求」と続いているが、全頁数の9割以上が椎尾のみの執筆で占められている点については創刊号のみの変則的な編集構成であるといえる(この点は、創刊時点での編集方針の細部における未確定を示している反面、満を持して発刊された雑誌『共生』と「共生」運動にかける椎尾の意気込みがうかがえるものでもあるとも言えよう)。

この後月刊誌として毎月1日発行であつたが、同年9月の関東大震災の影響により、第1巻第5号の発行のみ同年11月にずれ込んでいる。ただし第6号及び7号は不安定ながらも月1回の発行がなされており、翌1924(大正13)年の第8号より発行日が毎月20日と変更になってからは、定期的に発行がなされ

ている。また、第1巻第1号の奥付には、編集発行兼印刷人は福井明賢、印刷所は東京麹町の大杉印刷所、発行所は東京芝公園十号地一番の共生会中央事務所となっている。その後印刷所については第1巻第2号から第2巻第1号までは東京小石川の株式会社博文館印刷所であるが、第2巻第2号からは名古屋市中区の名古屋印刷株式会社へと変わっており、発行所についても、第2巻第6号巻末の「謹告」にて「近時益々事務の繁忙を加えて参りましたので、今回本會の出版に関する諸般の事務を東京麻布区筈町百貳拾六番地共生会出版部 振替五七四八三番 に別置移管する事になりました。従って発行所も出版部に移す事と致しました」として同号より共生会出版部に変更となっている。実際、移転後の第2巻第9号巻末には、共生会出版部発行の椎尾の著書『開かるるは生か死か 活ける浄土教』の発売広告も見られることから、これら印刷所や発行所の変更・移管は、関東大震災という災害に見舞われながらも、会として新たな活動展開の段階にはいった事を示しているといえよう。(尚、編集発行兼印刷人の福井明賢は1922(大正11)年の第1回結衆の準備段階より「共生」運動に関わっている人物であり、1931(昭和6)年の財団法人「共生会」設立計画に際しては、常務相談役となっている。)ちなみに、雑誌の定価は大震災の前後も変わらず1部20銭であった。

雑誌『共生』第3巻第1号は1925(大正14)年3月20日の発行。基本的に毎月20日の発行の月刊誌として安定した発行がなされており、第3巻は第10号(同年12月号)まで。翌1926(大正15~昭和元~)年からは1月号を第4巻第1号とし、第12号(12月号)までを第4巻とする年間ごとの号数となっている。発行形態等についても外観上の大きな変更はなく、編集人兼印刷人：福井明賢、印刷所：名古屋印刷株式会社、発行所：共生会出版部等、雑誌発行を支える根幹部分である編集発行実務体制についても第2巻第6号以来継続されており、非常に安定的な状況であった事がうかがえる。尚、雑誌の定価は創刊以来変わらずに1部20銭である。(ただし第3巻第1号には、「謹告」と題して「(前略)誌代切の諸賢に対してご催促がましいとは存じますが、経営上の都合も御諒察下さいまして一カ年分なり半カ年分なりをご送金願いたいと思います(後略)」との内容の一文も掲載されている。)

③昭和戦前期の発行状況

昭和年代に入っても、編集人兼印刷人：福井明賢のもと、年間12冊、毎月20日発行の安定した発行状況は継続され、誌面からも「共生会」の充実・進展の様子をうかがうことができる。

1932(昭和7)年の第10巻第1号より、A5判サイズとなった。

「年が更まると人の心も何となく蘇ります。殊に共生の第十年に当るといふことが何かなしに私共の心をひきしめてより一層積極的に進出せねばならぬとの決心と行動とを促してれます。その一のあらわれとして本誌も装いを新たにしました」と同号の編集後記にも記されているように、10年の節目を迎えるに当たって、誌面も含めたりニューアルが試みられているが、雑誌の基本的な性格は創刊当初から大きく変化していないと考えてよいであろう。

雑誌『共生』の発行状況が大きく変化するのは、1937(昭和12)年の第15巻第7号からである。「物価騰貴」の影響から40頁に減り、翌年の第16巻第8号からは16頁前後に、更に1944(昭和19)年の第22巻第3・4合併号からは8頁の(紙質も悪い)薄い小冊子となってしまっており、(その執筆内容もさることながら)所蔵されている雑誌の実物からも当時の戦時体制下における物不足の状況が伝わってくるものであった。ちなみに雑誌の定価については、先に述べた雑誌サイズの変更にあっても変わらず1冊20銭であったが、16頁前後に減頁された第16巻第8号からは非売品の扱いとなっている。

なお、この間の編集人兼印刷人については、1934(昭和9)年の第12巻第11号から1937(昭和12)年の第15巻第2号までは椎尾弁匡自身が、第15巻第3号からは、(やはり「共生会」設立当初からの主要メンバーの一人である)宮澤説成が務めている。

(2)清林寺所蔵椎尾弁匡関係資料目録の作成

本研究の調査の一環として訪問していた椎尾弁匡ゆかりの清林寺において、縁者の椎尾孝子氏より同寺に未整理のまま保管されていた関係資料を託されたのは平成19年度であった。また、三康文化研究所附属図書館が以前清林寺からの依頼で仮保管をしていた未整理の資料についても合わせて預かることとなった。不揃いの段ボール箱やトランク等に詰め込まれていた資料の中身は、直筆と思われるノートや手紙の他に、椎尾の講演や講話等を複数の関係者が書き取ったと思われる口述筆記原稿、仏教関係資料とその内容も多岐にわたっていた為、当初の予定を変更して平成20年度については本資料の分類整理と目録作成に力を注ぎ、700点余りの関係資料を明らかにすることができた。

なお、清林寺及び三康文化研究所附属図書館資料目録に関しては、最終的な校正と個人情報保護の観点からのチェック等を行った上で、浄土宗総合研究所発行の研究誌『仏教福祉』13号に投稿を予定している。

(3) 今後の展望

本研究を進める過程での新たな資料を発見するという不測の事態の結果、当初の目的である、仏教社会福祉実践と「共生会」との関わりについて、資料的に明らかにするまでには至らず、その前段である資料目録の作成に留まってしまったが、本研究開始の平成18年度段階では、浄土宗関係者もその存在さえできていなかった膨大な一次資料を確認してそれらを目録として整理し、今後の研究に活用可能な状況にできたことは、「嬉しい誤算」といえる成果であった。

今後、この資料を活用することで、「共生会」の組織実態ばかりでなく、椎尾弁匡の「共生」思想についても、より多角的に明らかにすることができると考えている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

①長谷川匡俊・藤森雄介・曾根宣雄・関徳子「第十回仏教福祉シンポジウム 「浄土宗寺院社会福祉事業の振興に向けて」、『仏教福祉』第11号、2008、1～73、査読無

②藤森雄介「雑誌『共生』総目次(戦前期編)について」、『長谷川仏教文化研究所年報』第31号、2007、29～108、査読無

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

6. 研究組織

(1) 藤森 雄介(FUJIMORI YUSUKE)

淑徳大学・国際コミュニケーション学部・
准教授

研究者番号:20364896